

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官・
国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官

赤堀 博行

これからの道徳教育

教育の根幹に道徳教育の問題があります。
梶田 叡一先生、赤堀博行先生にこれからの
道徳教育の展望を大いに語っていただきました。



人間教育研究協議会代表、学校法人聖ウルスラ学院理事長、
学校法人松徳学院理事長

梶田 叡一

ばいけません。道徳教育は、本当
は子どもの24時間、365日の話
なんです。

赤堀 学習指導要領では、「学
校の教育活動全体で行う道徳
教育を道徳の時間で補充、深化、
統合すること」としています。補
充、深化、統合する道徳の時間を
しっかりと行うためには、その前提
である教育活動全体の道徳教育
を的確に行っていく必要があります。

梶田 教科化することで、道徳
教育をクローズアップすることは
一つの方法だと思います。でも、
道徳の時間だけで道徳教育をす
るのだと考えるようになったら、
むしろ後退することになってしま
います。うわべだけで捉えられ、
矮小化されるのでは困ります。

赤堀 道徳の時間は、教育活動
全体の道徳教育を補充、深化、
統合する要の時間で、単独で成
り立つものではありません。

梶田 「心のノート」には、道徳
教育の内容が子どもにわかりや
すく表現されていて、しかも今日
的な課題も強調されています。
例えば、挨拶が強調されていま

す。また、してはならないこと、守
るべきまじりのことも入っていま
す。そのうえに、自分をどのよう
な方向に育てていかなければいけ
ないか、命の問題をどう考える
か、などにも触れています。「心の
ノート」を効果的に活用できると
いいですね。

赤堀 「心のノート」については、
多くの学校で使っていないのでは
ないかという議論がありました。
でも、「心のノート」が配布されな
くなって、そのよさ、大切さに気づ
かれた先生もたくさんおられま
した。「心のノート」は、梶田先生
のご指摘のように、道徳教育の内
容を本当にわかりやすく示して
いました。

地域によっては、初任者研修で
活用してもらっていました。「学
習指導要領解説」(以下「解
説」)を読むとわかるのですが、
子ども目線で道徳の内容を確認
できて、初任者の先生方にも理
解を深めていただくのによい資料
でした。

梶田 地域的には、道徳の時間
をあまり行っていないところも
あつて問題になっていましたが、

かなり改善されてきました。道
徳教育に対する認識は、教育界
全体では確実に深まってきたと
思います。

赤堀 そうだと思います。でも、
残念なのは、ここ数年で、各都道
府県、政令指定都市で文部科学
省の指定校が置けなくなり、全国
的な課題研究ができなくなったこ
とです。各自自治体が主体的に課
題をもつて進める事業に支援をす
る仕組みに変わったからです。そ
れで、熱心に事業を実施してい
だしているところと、あまり関心を
示していただけないところとの温
度差があつて気になっています。

梶田 これから、より一層力を
入れていくとして、どういう点を
まずお考えでしょうか。

赤堀 以前は、学校や先生によつ
て、道徳の時間に対する熱意が
違うのではないかと。少なくとも義
務教育では等しく指導してもら
いたいという声が少なくありま

道徳を子どもたちが 等しく学べるように

教育活動全体で 的確な道徳教育を

梶田 新しい学習指導要領で
は、道徳教育を大事にすること
が大きな柱の一つになっています。
「心のノート」は、数年間、イン
ターネットでの配信になっていま
したが、一人ひとりへの配布が、
また復活します。そういうこと
も含めて、全国の状況をまず話
していただければと思います。

赤堀 今回の学習指導要領の
改訂では、道徳教育は、道徳の時
間だけではなく、各教科等の中
でもしっかりとやっていくといふこ
とを確認しました。このことを
受け止めて、多くの学校では、教
育活動全体でどう進めていった
らよいかという計画づくりに熱
心に取り組んでいるところです。

梶田 道徳の時間だけで道徳教
育が終わるのではなく、各教科
など教育活動全体で行わなけれ
ばいけません。もつという、登校
から下校までの学校生活全体の
中に道徳教育が生きてこなければ
ならないと願っているのです。

指導に当たって、重要になるの
が教材です。よい副読本もたく
さんできていますが、子どもへの
持たせ方が地域によつてまちま
ちです。財政的に恵まれていると
ころは教育委員会の予算で購入
して配布しているところもあり
ますが、すべて保護者負担で購
入しているところもあります。あ
るいは全く持たせていないところ
もあるようです。

梶田 道徳を教科にして、副読
本を教科書にするという議論も
あります。それがどうなるかは
わかりませんが、少なくとも副
読本はほかの教科書と同じよう
に、公費負担にすべきですね。今
は多様な副読本が出ていておも
しろいのですが、検定をするよう
になったら大変ですね。多様な副
読本の中から、学校で選ぶことが
大切ではないでしょうか。

赤堀 子どもたちみんなが、道徳の
内容について等しく学べる教材を、
持つるようになることが大事です。

道徳を指導する
教師の力量を高める

梶田 教材の問題と、もう一つの問題としてよく出ているのが、先生方の道徳を指導する力量についてです。これも地域性があるようですね。

赤堀 道徳の時間の指導は、各教科と違って、目に見えてすぐに成果が表れるものではありません。そのため、なおざりにされがちでした。最近は道徳の授業公開をしていただくようになりましてので、先生方も道徳の時間に、意欲的に取り組まれることが多くなつたのではないかと考えています。

梶田 道徳教育を推進していくうえで、地域の教育委員会は、道徳教育の計画の立て方、道徳の指導のあり方、道徳の時間の展開の仕方について、教師の研修にもっと力を入れてほしいものです。

赤堀 国では、道徳教育についての指導者養成研修をずっと続けていますが、なかなか成果が見えません。道徳の時間は性格上、一定の道徳的価値についての学習ですが、子どもたちの日常生活での行為や習慣を考えると、当然一つの道徳的価値で片づけられるものではありません。例えば、震災時の行動では、命を大切にということや、相手に対する思いやり、自然に対する畏敬の念など、いろいろなものがあります。日常の道徳教育では、総合的に考えさせていくことが大切です。

「自分事」として考える

梶田 指導方法を考えるに当たってもう一つ大事なことがあります。価値の問題をどのようにして内面化していくか、いかに自分事にしていくか、です。「みんながそう言っているよね」ということで、どこか自分から遠い話にしてしまいがちです。どのようにして自分事にもっていくかが大切です。

そのために、例えば命の問題

にくいのが現状です。
梶田 それは文部科学省が音頭をとって指導者の養成をしているのですか。

赤堀 独立行政法人教員研修センターで中央研修として5日間、全国6ブロックで3日間研修をしています。

指導方法の工夫

梶田 指導者研修は大事ですね。道徳の時間もいろいろな展開の仕方があります。副読本中心で読み物資料を使うことが多いのですが、読み物資料の扱い方が課題です。国語の授業のようになつてしまつたのでは困りますから。

赤堀 読み物資料を教えるのではなく、読み物資料で道徳的価値について考えさせるのだとお話しています。

梶田 読み物資料でも、道徳的価値の方向づけをはっきりさせて、それについて子どもたちが感動したり、共感したりするものもあります。また、複数の価値を

も、自分の家族、友人、そして最後は自分自身の命を考えさせて自分事にしていくようにしたいものです。また、人との関係も、どうしたら友達が増えるのか、どうしたら友達と仲たがいがしないややつていけるのか、を考えさせたいものです。自分事のレベルにしていくのです。

赤堀 自分との関わりで道徳的価値を捉えることはとても大事なことです。例えば、道徳の時間で、読み物資料を使って考えていくときにも、子どもたちが自分自身のこととして捉えられるような発問をしたり、ディスカッションをしたり、表現活動をしたりと工夫をすることが大事です。自分はどうなのかと常に考えていける学習にしていく必要があります。

教師の感化力を高める

梶田 もう一つ大事なことがあります。道徳教育は同じことを言つても、先生の人柄によって説



出して、自分たちで考えさせるものなどもあります。

赤堀 道徳の時間は、「心に響く」とか「心を耕す」といったような非常に耳触りのよい言葉で片づけられてしまつたことがありません。でも、具体的にどのような指導するかが課題なのです。そのことについてしっかり「解説」を読んでいただけで、子どもたちが自分との関わりでしっかり考えられるように授業を進めてほしいものです。

梶田 「心のノート」では、自分

をどう育てていったらよいかという

ことで、いろいろな価値を総合的に考えさせています。例えば、命の問題です。阪神淡路大震災や東日本大震災の後、命の教育の取り組みをもう一度見直し、特別な形ではなく、日常化した中で考えていこうという動きがあります。また、他の人とのつき合い方においても、いろんな価値をどう考えさせるか、そして社会の中にどう生かすかなど、文部科学省も前から個別の価値の問題を取り上げながら、同時

得力が違うということ。このため、先生の修養が大事になってきます。

長野県では、小中学校で戦前から長く古典の読み合わせをしていました。今でも一部の地域では、月に一回ぐらい職員会議の後にテキストを決めて読み、お互いに考えを述べあつて理解を深めるといった時間を設けています。

赤堀 古典の輪読ですね。

梶田 それに使うポピュラーなテキストが3冊あります。

道元の『典座教訓』、親鸞の

弟子が書いた『歎異抄』、西田幾多郎の『善の研究』です。

こうした古典の輪読が戦前からなされてきました。これによって、算数や国語の授業がうまくできるわけはありません。ただ、物の見方、考え方、人間としての見識が深まっています。



心を育てる要の

道徳授業

赤堀博行 [編著]

補充・深化・統合へのアプローチ

↓

しっかり
充たそう

補充

↓

じっくり
深めよう

深化

↓

合わせて
考えよう

統合

これが補充、深化、統合です

学校の要

子どもが伸びる種がらうばらるる！

道徳の時間って何？

基本的な生活習慣、友達関係、自然に感動！、
働くこと、遊ぶこと、などなど…
こんなことばいある道徳教育の機会、
その道の道徳教育を道徳の時間で…

「編著」
赤堀博行

文部科学省教科調査官
国立教育政策研究所
教育課程調査官

定価 **1,800円**
(本体1,714円+税)

B5判・128ページ

収録内容について

- すぐに指導に生かせる指導事例を豊富に掲載
- 低・中・高学年それぞれの指導のポイントが的確に分かる
- すべての指導事例に赤堀先生による解説を掲載

道徳と特別活動を共に扱う世界で唯一の月刊誌

平成25年度4月号をもって、創刊30周年を迎えた本誌。
各教育誌がその役目を終える中、本誌はどうあるべきか。
これからの30年を見据えて、蓄積された不易を胸に、
新たな流行へと大きく舵を切る。

不易と流行を常に追い求める

創刊30周年目の挑戦

各号 700円
年間購読料 8,400円
(送料当社負担)

月刊誌
毎月15日発売
B5判・64頁

簡単注文!!
文溪堂ホームページから、
ぶんけい 特別活動 検索

平成25年度 新連載一覧 教育誌の限界に迫る超絶ラインナップ!!

新連載① 道徳教育とさまざまな教育課題との関連……赤堀博行 執筆

新連載② 諸問題を自ら解決する子どもを育てる特別活動……杉田洋樹 執筆

新連載③ 子どもの心を読み解くメンタリズム……メンタリスト DaiGo

新連載④ 指導の両刃を暴く 道徳と特別活動の噂の真相

新連載⑤ 何でも話せる学級風土の秘密を探れ!! 教室探検隊がゆく

新連載⑥ 元幼稚園教諭が綴る 幼稚園日記

道徳と特別活動を担当する文部科学省の先生方が毎年度さまざまなテーマで連載中。今、国が学校現場に求める指導の在り方を紹介!!

メディアで活躍中のメンタリスト・DaiGoが初めて教育業界へ。メンタリズムを生かして、子どもの心を読み取り、よりよい方向へ導く心理術を指南!!

それによって、子どもたちの前に立ったとき、いろいろな教科の細かい具体の指導を超えて、感化、つまり人格が人格に触れることによつて大きなよい影響を及ぼします。信州教育の伝統ですね。これを全国で大事にしたいものです。

赤堀 道徳教育では「感化」は大事な要素です。感化については解説にも示しています。各教科等で行う道徳教育では、各教科等の特質を生かした指導、各教科等に共通する学習態度、学習活動への配慮、そして教師による感化と例示してあります。具体的に、どのように教師の人間性を高めていったらよいかまでは触れていませんが、まさに先生が言われたことは大事だと思います。

梶田 教師の道を歩み出したら、人格を深めていかなければなりません。人間としての深まり、人間としての豊かさをもつていなければなりません。物の見方、考え方も深めていかなければなりません。そのようにして初めて、「解説」に書かれている価値の問題を先生が口にしたときに、そ

れが浮いた話にならないで、子どもにしっかりと伝わっていくと思います。

赤堀 中教審答申には「子どもたちと向き合う時間の確保」と書かれています。かつては夏休みにも先生方が自己研修に励むこともありましたが、今は忙しくてなかなかできないようです。でも、時間を見つけて自己を高めていかなければならないと思います。

梶田 子どもと向き合うことが教育の根本です。多忙に流されないで、人間としての深みをどのようにして増していくかを考えてほしいのです。

赤堀 かつて、「私はそんなに徳のある人間ではないから、道徳を教える資格がない」と言われる先生もありました。でも、まさに自分が完成された人間ではないことをしっかり自覚して、子どもたちの指導に当たることが大事だと思います。

梶田 教壇に立つということは、前から後ろからも見られる、つまり子どもからも保護者からも見られるということです。「やっぱ

り先生は、先生だよ」という尊敬のまなざしで見られないと、特に道徳はやっていけません。ある意味で、そうしたこわい道に踏み出してしまったわけですから、お互い手をつなぎ合い、支え合いながら、人間としての深さ、高さを追究していく、そういう方向になると道徳教育も本物になるといえます。

赤堀 先生の感化力があってこそ道徳教育が地に足のついたものになるのです。

学校が一丸となって

梶田 これから道徳教育を大事にしていくという大きな方向づけが示されて、非常に心強いと思います。そういう流れの中で、こういうことだけはやっていきたい、あるいは呼びかけていきたいといったことはあります。

赤堀 今回の改訂では、「道徳の時間を要として」という表現をさせていただいて、教育活動全体で道徳教育に取り組んでいた

くことになっていきます。校内で一人や二人の先生がやっても充実しません。「道徳推進教師」の役割も導入しました。どの先生方も課題意識をもつてしっかり進めていただくためには、校長先生のリーダーシップが大切になります。「校長の方針の下に」という文言も入りました。校長先生が道徳教育のビジョンをしっかりと、学校が組織的に一丸となって道徳教育に取り組んでいただきたいと強く思っています。

梶田 いま言われたように、「学校が一丸となって」という部分が大事です。一丸となっていく方向に、校長先生がきちんとリーダーシップをとってほしい。いずれにせよ、教育の根幹をなす課題として道徳教育があるわけです。教育界全体の課題として考えていきたいものです。

道徳教育をどう進めるか、示唆に富むお話をいただきました。ありがとうございました。(編集部)